

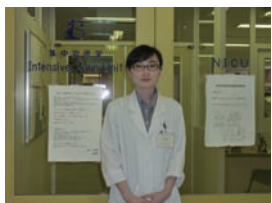
聖マリア国際協力ニュース

第111号

平成21年11月1日発行

新生児センターでの研修を終えて

韓国 忠南大学校病院 申智恵



申智恵さん(筆者)

初めて聖マリア病院に到着した時、私の中では、「韓国での忙しい日常から抜け出して、日本で貴重な新しい経験ができる」というときめくような気持ちと、「慣れない土地で、しかも一人きりで2週間過ごす必要はない」という不安な気持ちが混在していました。しかし聖マリア病院でお会いした人々は皆親切に接してくださいました。たまたま同じマリアンハウスに宿泊されていた9カ国の(JICA)研修員の方々も皆私を歓迎してくださいましたので、私の心配は杞憂に終わりました。

初めてNICUへ研修に行った時も、各先生方やスタッフの方が温かく私を迎えてくださいましたので、おかげで一層気持ちが楽になりました。研修初日に最も印象に残ったことは、こちらの新生児センターでは(自分の病院と比べて)ずっと多くの看護師が配置されているということです。私が勤務する病院では、医師にしても看護師にしても、たいへん人手が不足しており、そのため多忙を極めているのが現状です。こちらでは患者3人当たり1人の看護師が配置されているそうで、余裕を持って、患者の診療に時間を割くことができることを羨

ましく思いました。

新生児センターではいろいろな症例を経験することができ、診療面で韓国と共通している点、異なっている点をそれぞれ確認することができました。また帝王切開の手術の見学や、産科のクリニックからの患者搬送に同行したことなど、たいへん貴重な経験もさせていただきました。これらの経験は永らく私の記憶に残り続けることと思います。

研修を離れた話題になりますが、聖マリア病院に滞在した2週間のうち、病院で行われている韓国語教室に5回参加しました。受講生の中には3年も韓国語の勉強を続けている方がいらっしやって驚きました。また韓国に行っても、ある程度の会話には困らないだけの實力を持った方も少なくなく、驚きと同時にとても嬉しく感じました。機会があれば、私も日本語の勉強を始め、日本の方とより深く交流できるようになりたいと思います。

最後にこの2週間の研修は、私にとって本当に貴重な経験になりました。このような機会を与えてくださった関係者の皆様に心から感謝申し上げます。

※申智恵さん(Ji-hye Shin)は、韓国の忠南大学校病院に勤務する小児科医で、10月6日～16日の期間、当院新生児センターにて研修を受けました。

JICA 研修員と病院職員との文化交流会を開催

国際事業部 矢山進一



開会に際して全員で乾杯

去る10月6日と10月23日の両日、JICA 研修員と病院職員との文化交流会を開催しました。この交流会は4年前から実施していますが、職員にとっては異文化に接することができる貴重な機会であると同時に、研修員にとっても多くの日本人と知り合う機会となり、

どちらからも好評を得ていました。今回の交流会にも、国際協力や国際交流に関心を持っている職員の方々も多数集まってくださいました。開会してしばらくは、研修員と職員の間にも緊張気味でしたが、やがてどちらかともなく声をかけ、会場のあちこちで交流が始まりました。最初はやはり、「どこの国から来たのですか?」と、研修員の出身国を尋ねることから始まる会話がぞく、多くの研修員が世界地図を指差しながら、それぞれの母国について一生懸命説明していました。一方、研修員の方からは、「この病院でどんな仕事をしているのですか?」と大抵質問されます。そこで自分の仕事について、何とかうまく英語で説明しようと努力されていた職員の方々の姿が印象的でした。

今回初めて交流会に参加された職員の方(一部)に感想を伺いましたので、以下ご紹介します。「英語があまりできないので、伝えたいことを十分に話すことができず、もどかしさを感じました。しかし実際に

は言葉だけでなく、表情や仕草でもコミュニケーションがとれるのだと判りました。今後も交流会への参加を続けて、外国人との交流に慣れたいと思います。」(看護師・女性)

「初めての参加で緊張しましたが、研修員の方から声をかけてくれたので気が楽になりました。英語はあまりできませんが、国際協力に対する興味が深まりました。」(介護福祉士・男性)

「初めての参加でしたが、研修員の皆さんが優しく接してくれたので、すぐに緊張が解けて会話が弾みました。次の機会にもぜひ参加したいと思います。」(理学療法士・男性)

「英語はあまり通じませんでしたが、楽しかったです。これから英語を勉強して、もっとコミュニケーションがとれるようになりたいと思います。」(看護師・女性)

尚、この交流会では、英語をまったく話せない方の参加も大歓迎です。その場合、周りの者が通訳をして、研修員とのコミュニケーションをサポートしますので、ご安心ください。来年2月にはJICA研修「南東欧地域病院運営コース」の実施に合わせ、次の交流会開催を計画しています。国際交流に少しでも関心がある方は、語学力に関係なく、積極的に参加していただければ幸いです。



歓談する研修員と職員たち

記憶に残る熊本旅行

JICA 研修員(ウガンダ)ヌワマニャ・デイヴィッド

2009年10月17日、私たちJICA研修「病院経営・財務管理」コースの研修員一同は、聖マリア病院が企画してくださった熊本県への旅に出発しました。

旅の途中、ハイウェイを走るバスの車窓からは、田んぼや緑の草木、そして美しい花々を眺めることができ、それらの様々な色彩は私たちの目を大いに楽しませてくれました。しかし、これはまだ旅の始まりでしかなく、この後、まだまだ多くの素晴らしい光景に出会える筈であることを私たちは確信していました。



高森トンネル内を散策する筆者

バスが出発して1時間ほど経過した頃、私たちは非常に美しい山の尾根を登り始めました。後になって、その尾根は阿蘇山のカルデラの一部であることを知り、驚きました。丘に吹くそよ風を感じつつ、巨大な火口の中に存在する集落の全景を眺めるのは、とて

も魅惑的な体験でした。やがて、私たちの視界に風力発電所のタービンが現れると、私たちの目はそれに釘付けになると同時に、日本人の高度な技術の一端に触れた思いがしました。

それから私たちは尾根を下り始め、やがて最初の目的である白川水源に到着しました。その場所のあまりの美しさに、私たちがあらゆる地点からいっせいに写真を撮り始めたため、そこはまるで写真館であるかのように様子が一変しました。そして私たちは水源から水を汲み取り、持参したボトルに入れて持ち帰ることにしました。水源の側には神社があり、川の神様に祈りを捧げるため、そこへ多くの人々が立ち寄る様子を、私たちは興味深く見守りました。

次に私たちは高森トンネルに移動しました。(内部が色彩豊かな照明等で彩られた)そのトンネルの美しさは、他に並ぶものが見つからないほどでした。トンネルの入り口にある泉では、あらゆる瞬間を逃さず撮影しようとするので、誰もがこのようにカメラのシャッターボタンにかけられていました。トンネル内は非常に寒かったのですが、その美しさはある種の温かみを放っており、おかげで私たちは皆楽しい気分であることができました。清らかな水の流れるトンネル内の照明が映える様子は、正に忘れがたい光景でした。

その後、同じ高森町にあるレストランに移動し、皆で昼食を取りました。そこで食べた田楽という料理は、多くの意味で私たちを楽しませてくれました。目の前で、いろんな食材が直火で調理されている間は、それらが放つ良い香りを楽しむことができました。食材に火が通り、食べ頃になると、私たちは串焼きの野菜や魚などを



初めての田楽料理を楽しむ研修員

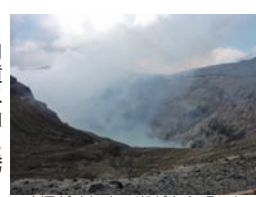
贅沢な昼食を終えた後、私たちは次の目的地である

阿蘇山へ向かい、初めて本物の活火山を見ることができると期待に胸を膨らませました。阿蘇山までの途中にも、美しい風景が広がっており、私たちは慌しくあらゆる方向へカメラを向けました。研修員の多くは、良く整備された農地で草を食む牛たちにも注目していましたが、特に私は、その光景から、母国ウガンダの農園で過ごした日々を思い出さずにはいられませんでした。



強風で?噴煙が晴れた阿蘇火口

阿蘇山頂に到着すると、私たちはすぐに火口へ向かいました。火口からは噴煙が立ち昇っており、ここが活発な活動が続く火山であることを確認しました。すると、まるで私たちを誘うように噴煙が晴れ、火口湖が姿を現しました。その美しさに、皆すっかり寒さを忘れて、しばし火口と周辺の風景に見入りました。



噴煙が晴れ火口湖が姿を現した

あまりに阿蘇が美しかったため、私たちはここを出発する時間が迫っていることになかなか気づきませんでした。そして出発時間の3時30分となり、バスで山を下り始めてからも、時折、噴煙を上げる火口の方を振り返らずにはいられませんでした。山を下る途中では、「米塚」と呼ばれる小さな山を見ることができました。植物に覆われ、きれいなドーム型の形状をしたその小さな山は、私たちに究極の美を感じさせてくれました。

この旅の間、私たちは日本に来て学んだ僅かな日本語を駆使して、多くの日本人と意思を伝え合いました。異なる言語を話す人間どうしであっても、お互いを敬う気持ちがあれば、十分に意思の疎通はできるのだと感じました。

最後に、この旅行の費用を負担してくださったJICA、また昼食を提供していただいた聖マリア病院に感謝を申し上げます。国際事業部の杉本さん、矢山さん、および研修コーディネーターの鈴木さんが、この旅行に係る業務を立派に行ってくださいましたことにも感謝致します。この熊本旅行での素晴らしい体験は、永遠に私たちの記憶に刻まれ、決して忘れることはないでしょう。

“Arigato gozaimashita!”

今月の動き

- 【派遣】
 - ・11月15日(日)～12月25日(金)
 - 山崎裕章(国際事業部): JICA ミャンマー国主要感染症対策プロジェクトへ短期専門家として派遣。
- 【その他】
 - ・11月3日(火)～11月8日(日)
 - ラオス国スタディーツアー実施。参加者は新谷瞳(救急室)、佐藤利幸(リハビリテーション室)、井上智之(聖母4F病棟)、福田千恵(CU・CCU)の4名
 - ※浦部大策(国際事業部)が引率